2月6日　「地の塩・世の光」　聖書研究

テキスト　マタイによる福音書 5章13〜16節

山上の説教は、主に従う弟子たちに語られた言葉ですから、ここで語られています「あなたがた」も、主の弟子たちであり、教会に連なる私たちキリスト者のことを指しています。主イエスは、ここで弟子たちに向かって「あなたがたは地の塩である。あなたがたは世の光である」とおっしゃっています。主の言葉によく注目しますと、「〜になりなさい」と言っておられるのではなく、「〜である」と事実を告げておられることに気付きます。「地の塩・世の光」という言葉は、よく人間の努力目標を表わす言葉として、誤って用いられてしまうことがあります。そうしますと、多くの人が、自分は地の塩・世の光とはとうてい言うことはできない。この世で何のお役にも立てていないと思ってしまうのではないでしょうか。しかし主イエスは、私たちが努力するまでもなく、祝福をもって告げてくださるのです。あなたがたは、地の塩・世の光とされているのだと。

そのうえで、改めて主の言葉に耳を傾けていきましょう。「あなたがたは地の塩である」(13)。主は、この世界（地）において、あなたがたは「塩」であると主はおっしゃいます。塩は、料理の味付けや防腐剤として用いられるように、キリスト者はこの世にしっかりと味を付け、腐敗し堕落することを防ぐ働きをするのです。生活の中で塩がなくてはならないように、この世においてキリスト者はなくてはならない存在として世に遣わされています。次の、「あなたがたは世の光である」（14〜15）も、キリスト者にはこの世を明るく照らす使命が与えられているということです。

もしキリスト者が、「地の塩・世の光」であることを忘れてしまうならば、塩気がなくなり、何の役にも立たない塩、もはや塩ではないようになってしまいます。また、ともし火を燭台に置かずに升の下に置いてしまうことも、全く無意味なことです。しかし、本来それはありえないことです。なぜなら、「山の上の町は、隠れることができない」ように、光である自分を隠すことはできないからです。

16節では、光を輝かす生き方について、「立派な行い」というふうに言い換えられています。ただ「立派な行い」とは、周りから、「さすがクリスチャン」と称賛してもらうことや、人々に気に入ってもらうために、愛想よく振る舞うことではありません。今回のテキストの直前には、「義のために迫害される人々の幸い」（5:10-12）が語られています。神さまに従って生きるときに、周りからほめていただけるのではなく、むしろ迫害を受け、皆から悪口を浴びせられるというのです。それにもかかわらず、キリスト者が世に遣わされるのは、私たちをとおして、「あなたがたの天の父をあがめるようになるため」(同節)だからです。神が神としてあがめられるのは、人々の魂にキリストの救いが届くことによって起こります。ですから、キリスト者がなすべき立派な行いとは、福音を伝えることです。キリスト者として生かされている自分を喜んで証しすることです。

主イエスが、私たちのことを、「地の塩・世の光」と呼んでくださるのは、救いの光である（マタイ4:16）主イエスご自身が私たちの闇を照らし、心の腐敗をきれいにしてくださり、神さまの前に生きるに相応しい者へと造り変えてくださったからです。だからもう、私たちは役に立たない塩ではありません。誰かから捨てられても、迫害されることがあっても、神さまから投げ捨てられ、踏みつけられるような人生を歩むことはありません。私たちは、神の味を持った人間です。いかなるときも主に結ばれて光の子とされているのです（エフェ5:8-11）。この喜びは隠すことなどできないほどに輝いています。この喜びを隠さずに、光の出所であるキリストを示して生きていくことの中に、まことの平和も生まれるのです（9）。

（藤井　真）

2月6日　「地の塩・世の光」　説教展開例

テキスト　マタイによる福音書　5章13〜16節
参照カテキズム　子どもカテキズム　問65

〔単元のねらい〕

2月11日は、信教の自由を守る日です。今朝は、この日をおぼえて礼拝をささげます。1872年の「学制」から敗戦までのおよそ70年間、義務教育は国民学校で担われていました。必須の学科とされた「修身科」において、宗教・道徳教育がなされ、神官（神主）が担いました。つまり、学校とは国家神道の教育機関でもありました。戦後、この弊害を絶つために、憲法20条、旧教育基本法九条において、公立学校では特定の宗教教育は禁じられました。しかし、今、学校現場では、文科省によって「心のノート」が副読本として（税金で）配布されています。その内容は、「道徳的な良いことを言っている」との評価が少なくないと思います。しかし、わたしどもの目から見れば、極めて「神道的」な色彩が濃いものです。しかも、改悪された教育基本法によって、いよいよ「心のノート」が目指す、「国と郷土を愛する」心の教育が推し進められていく傾向は否めません。子どもの教会の教育にとって、子どもたちの置かれている学校教育の現実を知ることは、大切です。キリスト教教育こそ、人格教育の基礎であり、真実の意味で「心」「良心」を養い、磨く道です。人格は、生ける三位一体の神との関係において形成されます。教会学校・子どもの教会の尊い使命をいよいよ確信し、いっそう励んでまいりましょう。

「私たちは世の光」

「あなたがたは世の光である」。今日の暗唱聖句です。

最澄というお坊さんが開いた比叡山の延暦寺という有名なお寺では、「一隅を照らす」という言葉がとても大切にされています。自分が暮らしている社会、地域、学校などで、自分自身が光となって、明るく照らす人になろうということだと思います。

しかし、イエスさまは、「あなたがたがこの世界を明るく照らす人となりなさい」とおっしゃったのではありません。あなたがたは今もう「世の光なのです」と、断言されました。

なぜでしょう。もともと、イエスさまは「わたしは世の光である」と自己紹介されました。イエスさまご自身が光そのものなのです。これは、太陽と月の関係になぞらえることもできるかもしれません。太陽は自分で光ります。赤々と燃えています。しかし月は、太陽の光を浴びて、その光を反射します。晴れた満月の夜なら、それだけで、どんどん歩いて行けるほど、光を放ちます。

さて今、イエスさまの目の前には、愛するお弟子さんたちがいます。つまり、彼らは、世の光そのものでいらっしゃる主イエスの光を浴びているわけです。つまり、イエスさまはこうおっしゃったのです。「あなたがたはわたしの光で照らされているから、光っていますよ。あなたがたも世の光なのですね」。

光の反対は闇です。そして、イエスさまはこの世界を暗闇と見ています。それは、自分とその考え、欲望を神にしてしまって、光でいらっしゃる神さまを、イエスさまを、拒絶してしまったからです。

ところが暗闇は、自分が真っ暗闇であることを分かっていません。むしろこんなふうに考えています。「教会のほうが暗闇だ、そんなところに行っても楽しくない」。その人たちは、自分の中に光がないので、こんなまったく逆さま、正反対のことを考えてしまうのです。そして、自分たちこそ、本当の光を持っていると考えて、光であるかのよ

うにふるまうことが多いのです。

皆さんの学校では、「心のノート」が配られているでしょう。

公立の学校では、イエスさまのことを教えてくれません。他の特定の宗教を教えることも法律で禁じられています。

けれども昔、今で言う小学校では、日本人はみな天皇の子どもなのですと教えられました。天皇は、日本という国を造った神さま、太陽の神さまの子孫で、天皇は神さまなのですと教えました。日本は、この天皇の国なので、「日の本」と言うのだと教えられました。つまり、世界で一番偉いのは、この天皇なのだ、日本はアジアの国々を悪い国々から守ってあげるのだと教えていました。このような教えをもって、アメリカやイギリスと戦争してしまいました。戦争に負けて、新しい憲法が作られてからは、そんな宗教を学校で教えることは禁止されています。

けれども実は、今でも、昔のような考えを持ち続けている大人の人たち、それを子どもたちにも教えたいと願っている人たちは、たくさんいるのです。

さて、お弟子さんたちは、そしてキリストの教会は、イエスさまの光を浴びて、はっきりと分かりました。ぼくたち私たちを明るく照らす光、生かす光、いのちを与える光とはイエスさまだけだということです。それを認めないことが暗闇だということです。

イエスさまからの光を浴びた人は、暗闇が分かります。何より、自分の心の中にも暗闇があることにも気づきます。だからこそ、イエスさまの光を浴びたくなります。浴びなければ、元気に生きられないと分かるのです。

どうぞ、イエスさまの光を浴びましょう。それは、イエスさまの前に出ることです。お祈りすることです。今、ここでしているように、礼拝することです。聖書のお話しを聴くことです。そうすれば、光を反射して、ぼくたち私たちもそのままで暗闇を照らす人とされるのです。

でも、実際に、光を照らす人ってどんな人、どんなことをする人なのでしょうか。それを考えるときもまた、イエスさまを見つめればいいはずです。イエスさまって、どんなお方ですか。どんなことを考えていらっしゃるのですか。どんなことをなさったのですか。イエスさまの真似をしてみるとよいはずです。

そして、すぐに分かります。イエスさまの真似をするのは、とても難しいということです。すぐに、意地悪な心が出てきます。自分勝手な弱い心が出てきます……。でも、大丈夫です。イエスさまを見つめ、イエスさまとお話しすれば、イエスさまの光がぼくたち私たちを照らし、清くしてくださるからです。

ですから、私たちにとって一番大切なことは、このイエスさまとお話しすること、向き合うことです。人間は、イエスさまとお話しするとき、本当の人間になることができるからです。イエスさまとお話しすればするほど、ぼくたち私たちの心は、きれいになり、深くなって、光りを反射し始めるのです。

今朝、ぼくたち私たちは、みんなこの光を浴びて、光の子どもです。

最後に、イエスさまを信じている先生とお話しすることも、大切です。分級で、先生とお話ししてください。学校の勉強は大切です。けれども、イエスさまのこと、神さまのことを学ぶことのほうが、比べられないほど大切です。

今、皆のお友だちはどこにいるのでしょうか。暗闇の中にいながら、気づいていないのです。どうぞ、お友だちを誘って、一緒に光を浴びましょう。光の子として、イエスさまの光を広げていきましょう。

(相馬伸郎)

〔今週の暗唱聖句〕　マタイによる福音書 5章14節前半

あなたがたは世の光である。

2月6日　「地の塩・世の光」　幼稚科

〈ねらい〉

「あなたがたは、地の塩・世の光である」と言われたイエスさまの言葉に注目したい。この言葉が、地の塩・世の光となりましょうという努力目標ではなく、イエスさまにあって、すでに地の塩・世の光なのであるということを伝える。

〈展開例〉

わたしたちの住んでいる社会は、神さまの言葉に目を向けようとしていない。

一見、豊かで住みやすい環境のように見えるが、その心は神さまから遠く離れている。世の人々にイエスさまのことを知らせることが、「地の塩・世の光」としてのわたしたちの使命でもあることを伝えたい。

〈お祈り〉

神さま。わたしたちを、イエスさまにあって、地の塩・世の光としてくださっていることを感謝します。わたしたちが、イエスさまを信じ続けて、神さまに喜ばれるこどもとして成長していくことができますように。アーメン。

〈やってみよう〉

○「あなたがたは、地の塩・世の光である」と言われたイエスさまをおぼえ、地の塩ちゃん（くん）・世の光ちゃん（くん）とお互い呼び合ってみよう。

○塩の働き（味を整える、腐敗防止など）をおぼえながら、塩の使われている製品などの表示を見ながら、たしかめてみよう。

醤油・味噌・せんべい・スポーツドリンク・チーズ・食パンなど

○光の働き（暗闇を照らす）をおぼえながら、光るものに目を止めてみましょう。

太陽・星・月・電球・火・ろうそく・青色ダイオードなど。

2月6日　「地の塩・世の光」　小学科下級

〈ねらい〉

主イエス様は私たちを照らす光です。その光に照らされて、私たちも神様の子どもとして光ることができます。

〈はじめに〉

寒い毎日が続いています。風邪は流行っていないでしょうか。教師自身の健康は守られていますか。毎日の生活、仕事、家族の問題、学校の勉強、サークル活動、様々な中に置かれている中で、この分級の奉仕者として用いられています。忙しい毎日を送っている私たち自身が主に整えられ、御言葉を学び、子ども一人ひとりを覚えて日々祈る者でありますように。

〈御言葉に聴きましょう〉

①13節を読みましょう。
②あなたがたは、何だと言っていますか。
③14節を読みましょう。
④あなたがたは、何だと言っていますか。

〈展開例〉

イエス様は、お弟子さんたちに大事なことを教えられました。「あなたがたは地の塩ですよ、世の光ですよ」と言われたのです。どういう意味でしょうか。

お塩をなめたことありますか。しょっぱいですよね。お塩は何に使いますか。みなさんは学校にいることが多いので、あまり使いませんね。家族の中で一番使っているのは、多分ご飯を作ってくれるお母さんやお父さんかもしれません。お塩はお料理に一番使われます。入れすぎるとそのお料理はおいしくない、ちょうどいいくらいに入れると、あぁ今日のご飯はおいしかった！ ということになります。それとお塩は食べ物を腐らせないという大事な役目もあります。お塩はとても大事なものなのです。

世の光について考えましょう。光は何のためにありますか。暗いところを照らすためです。明るいところでは、懐中電灯もろうそくもいりません。暗いと何も見えなくなって、どこに何があるのか分からなくて困るので、私たちは光を照らして見えるようにします。光も大事なものですね。

あなたがたは地の塩、世の光です、とイエス様は言われました。家族の中で、お友だちの中で、教会の中で、私たち一人ひとり神様に愛されている大事な存在です。特に神様をまだ信じていない人の中で私たちは、塩のように、光のように、大事ななくてはならない存在として生かされています。私たちにどんな役目があるのでしょう。周りの人のことを大事にする、優しさをあらわす、イエス様のこと伝える。恥ずかしかったり、勇気がいる時もあります。でも大丈夫です。神様がその思いを、力をくださるからです。

「わたしは小さい火」（『ふくいん子どもさんびか』86番、いのちのことば社）をいっしょに賛美しましょう。

①わたしはちいさいひ　ひかりましょう
　わたしはちいさいひ　ひかりましょう
　ひかれ　ひかれ　ひかれ
②かくれましょう　いいえ　ひかりましょう
　かくれましょう　いいえ　ひかりましょう
　ひかれ　ひかれ　ひかれ
③あくまが　ふいても　ひかりましょう
　あくまが　ふいても　ひかりましょう
　ひかれ　ひかれ　ひかれ
④せかいのぜんちに　ひかりましょう
　せかいのぜんちに　ひかりましょう
　ひかれ　ひかれ　ひかれ

〈お祈り〉

神様、私たちをあなたのためにお用いください。アーメン。

2月6日　「地の塩・世の光」　小学科上級

〈ねらい〉

神様を信じる者が、地の塩・世の光として特別な存在であることを学ぶ。

〈展開例〉

神様は、私たちのことを地の塩、世の光であると言われました。塩と光がでてきました。それぞれの役割は何でしょうか。

塩は、小量でも塩を少量でもなめると、ピリリと辛いね。塩には食べ物を腐らせず、よい状態のままにする働きがあります。塩はとても大切で、もし塩がこの世界からなくなったら実は大変なことになるんだよ。みなさんは、その塩です。

私たちが塩だということは、何かを腐らせない働きを持つわけですが、どういうことだろう。また、私たちが腐ってしまうというのはどういうことだろう。それは、神様の気持ちを何とも思わなくなって、悪事を何とも思わなくなってしまうことです。それに悪いことが何かもわからなくなってしまうことです。反対に、神様は一番正しいお方ですから、神様のことを知れば正しいことがわかります。今、みなさんは大丈夫ですか？

自分は悪いことに染まらないと思っていても、まわりの友だちが隠れて悪いことをしたら、自分もついついつられてしてしまうとうことはないですか。あるいは、自分一人だけ、みんなから「わー、すごい！　わー、ありがと！」と言われて、注目を浴びる時に、気持ちが大きくなって、一瞬小さな悪を何とも思わなくなることはないでしょうか。

悪が小さくても、神様が悲しみます。同じように、皆さんも小さな悪でもしないようにしましょう。周りの友だちがやっていても、自分も一緒になってやってはいけません。あなたは特別な塩なんです。むしろ、それはだめだよと友だちに言えるようになって、腐敗を止めるようにしましょう。そういう人を神様は喜んでくださいます。

聖書を見ると、塩気をなくなったら捨てられると書いてあるけど、塩気を無くすな、ということです。神様のことを知っている点で、あなたは特別なんですね。

それから、あなたは世の光と言われています。昔は電気がなかったので、ろうそくやたいまつが光でした。暗い部屋全体を照らすためには光はどこにおきますか。部屋全体から見えるところにおきます。私たちはこそこそ隠れて生きるのではありません。みんなの間で、神様が求めておられることを大切にしていきましょう。

光は、つけられて初めて光ります。神様がみんなをイエス様と結び付けて光らせてくださいます。イエス様は私たちのお手本ですし、私たちを清くしてくださるお方です。それに、イエス様だけができる特別なことをしてくださいます。罪をわかるようにし、神様が喜ばれることをできるように助けてくださいます。

そうすると、私たちが話す言葉や行なうことは、神様が喜ばれることをするようになります。神様が立派だと思うことをするようになるし、したくなります。私たちは、周りの人たちはそれを見て、神様を知ることができるようになるために、地の塩・世の光でいることを祈っていきましょう。

〈祈り〉

神様。周りのお友だちと一緒にいる時でも、神様の喜ばれることをできますように、私たちを強くして、地の塩・世の光としてください。イエス様の御名により祈ります。アーメン。

2月6日　「地の塩・世の光」　中学科

〈ねらい〉

無力な者を輝かせてくださる主に感謝する。

〈展開例〉

①イエス様は今日の箇所で、「人々が、君達の立派な行いを見て、君達の天の父をあがめるようになる」、こんな言葉を語られた。

Q．皆は最近、立派と思える様なことをしただろうか？ 川で溺れている子犬を助けたり、人質になっている親友を助けに行ったり、そんなシチュエーションはめったにない。日常にある立派な行いとは、落ちた消しゴムを拾ってあげることだったり、隣の席のやつにシャーペンの芯をあげたりする程度のことだったりする。私たちの日常の中で輝くような歩みというのは本当に稀なものかもしれない。それどころか反抗期、思春期まっさかりの年頃である。人に連れない態度をとったり、誰かとぶつかりあったりなんてことのほうが多い人もいるかもしれない。

②しかし、イエス様はそんな君達のことを隠すことの出来ない輝く光であると言われる。それは、君達がイエス様という光輝く方に生かされているからである。君達がどれだけ「わたしの生活に輝くところなんてない」、こんなふうに思っても、神様の愛を知り、イエス様の愛を知って生きるクリスチャンにはかならず隠すことの出来ないクリスチャンらしさ、誰かを思っての愛の業が溢れて来るというのである。

③しかし、それは「なんだ。じゃあ、自然に好きなようにやってりゃいいんじゃないか」というのではない。イエス様は、君がクリスチャンらしさを失って日々を送るなら、それは塩気を失ったナンセンスなクリスチャンだ、と厳しく言われた。先週、話した通りイエス様と一緒に生きていくとは、何でも赦されるから好き勝手に生きるというのではない。どんな罪をも赦されているからこそ、失敗を恐れずに積極的に人を愛することができるのだ。イエス様は命をかけて、君の人生を愛に溢れる日々に造り変えようとされるのだから。

④「出来ない。知らない。めんどくさい」。こんな思いもあるかもしれない。だけど、教会につながり、イエス様の教えに触れ、神様からの愛され方を知っている君の中には、同時に誰かの愛し方も養われていく。誰かに尽くせない自分のしょぼさを見つめれば「ムリ、ムリ」と引っ込みたくなるかもしれない。でも、そう思う心の裏には、愛のある日々にあこがれる心が絶対に潜んでいるはず。イエス様の言葉に触れ、愛に触れて生きるならば必ず君の内側には、誰かを愛そうとする思い、誰かを愛したいという思いがともされる。その思いを隠してしまうのでなく、大胆にその思いに乗っかって生きて欲しい。君を愛する神様の光は、そんな君をとおしてこそ、世界の隅々に在る闇を照らすのだから。

⑥これは、学校の友達や神様を知らない人達と違う生き方かもしれない。大真面目に神様と人を大切にする生き方に「ウザイ、キモイ」、こんなことを言う人がいるかもしれない。しかし、そこでビビって、神様を知らない人達と同じライフスタイルに埋もれないでほしい。愛を目指す君の生き方は、君が思う以上に魅力と価値がある。成長期の君達に愛する心が育てられることを心から願う。

〈祈り〉

イエス様。愛の光を与えてください。アーメン。